

第31回母子保健奨励賞受賞者の横顔

竹林 千佳氏

(46歳) 保健師・北海道



平成5年、町保健師を経て北海道に奉職。離島における母子保健の向上に意欲的に取り組み、妊婦および新生児の全戸訪問を行った。平成6年から室蘭保健所にて、支援の必要な母子の情報を医療機関と共有し、家庭訪問などの早期支援に結びつけるための体制づくりに力を尽くした。また、「児童虐待を二度と起こさない地域づくり」に取り組む中で重大事例の検証を行い、多機関が連携して取り組む虐待防止活動の推進に大いに寄与した。

水井 雅子氏

(53歳) 助産師・富山県



勤務助産師として周産期医療に携わるなかで母乳育児推進活動を開始。平成4年、地域に根ざした育児支援を行おうと母乳育児相談を核とする助産院を開院し、育児中の母親を支援する活動に取り組んだ。行政と連携して行う妊産婦や新生児の訪問指導、市町や医院が主催する赤ちゃん広場や育児教室の講師などを通して、地域の子育て支援に熱心に取り組んだ。また、思春期保健にも積極的に取り組んで、広く母子保健の向上に功績があった。

沼田 智明氏

(54歳) 医師・青森県



病院勤務を経て昭和58年より六戸町の地域医療活動に取り組む。乳幼児健診では保健師、栄養士らとともに継続的で親身な保健指導を行い、育児不安の軽減および健診率向上に貢献した。予防接種の個別接種にいち早く取り組むとともに健診等で個別指導を行い、接種率の向上に努めた。また、中学校の生徒や保護者等を対象に心身の発達相談や講演を行う「思春期教室」に熱心に取り組むなど、幅広い保健活動を通して住民から深い信頼を得た。

橋爪 さつき氏

(53歳) 保健師・山梨県



昭和53年旧石和町に奉職。育児環境が不安定な母子が多いことに気づき、個別支援の充実に努めた。愛育班の育成支援、母親学級での母乳育児推進指導に熱心に取り組んだ。3歳児のう歯保有率の高さに着目して2歳児歯科健診を導入。平成6年、ことばや発達に遅れのある子どもの個別相談事業を立ち上げ、平成17年には児童虐待防止ネットワーク会議に参加して力を発揮するなど、多方面にわたる地域に根ざした保健活動で成果を上げた。

伊勢 睦子氏

(52歳) 保健師・秋田県



昭和55年旧八森町に奉職。乳幼児の歯科保健の重要性に着目し2歳児歯科健診を実施するとともに1歳6か月児・3歳児健診に歯科指導を導入した。生後3か月までの乳児訪問を熱心に行い、育児不安の軽減や乳児健診の受診勧奨に努めた。また、長年にわたって愛育班の育成と活動支援に尽力し、平成21年には「健康はっぼう21」の策定にあたって住民組織や関係機関との調整を行うなど地域の母子保健の中心的存在として力を発揮した。

澁谷 いづみ氏

(52歳) 医師・愛知県



昭和57年保健所医師として活動を開始。豊田保健所にて管内の乳幼児健診の診察と指導を一手に行った。健診の質の確保と情報の一元化を目指して「愛知県母子健診審査マニュアル」の作成に参画、活用しやすいマニュアル作りや時代に合った改正を行った。安城保健所では医療と保健の連携体制を構築し、ハイリスク妊婦や多胎児の支援につなげた。また、児童虐待防止やハイリスク家庭への支援など医療と保健両分野で力を発揮した。

児玉 祐子氏

(48歳) 保健師・茨城県



昭和58年旧下館市に奉職。乳幼児健診や妊婦の保健相談、予防接種率などの向上に熱心に取り組んだ。平成8年、母子保健計画の策定にあたり市の重点施策として幼児期から思春期まで一貫した性教育を行う思春期保健事業を立ち上げ、平成19年には筑波大学と連携して思春期の健康を支援する活動へとつなげた。また、少子化で困難が増している子育てを多方面からサポートする子育て支援に尽力するなど地域の母子保健向上に貢献した。

小畑 美由紀氏

(51歳) 保健師・兵庫県



昭和55年旧大屋町に奉職。急速に少子高齢化が進むなかで新生児全戸訪問、6か月ごとの乳幼児健診を実施するなど関係機関と連携して母子保健の向上に努めた。幼児・児童へのフッ素塗布、小中学生を対象とした成人病予防健診、中高生の思春期体験学習など継続的な健康支援活動で住民の信頼を得た。また、こんにちは赤ちゃん事業、健診後のフォロー、発達障害児への支援などにも熱心に取り組んで地域の母子保健の向上に大いに寄与した。

福田 環氏

(52歳) 助産師・栃木県



昭和54年、上都賀総合病院産婦人科病棟助産師として活動を開始。妊産婦の保健指導や助産ケア、看護の質の向上に努めた。精神科病棟勤務を通して乳児期の母子関係の大切さを学び、母子の支援に取り組んだ。平成14年、「健やか親子21」施策として思春期保健の出前講座を実施。以来、指導者の育成、相談環境の整備、ピアカウンセラーの支援、保護者への知識普及など思春期保健に積極的に取り組んで、幅広い保健環境の整備に寄与した。

八木 静恵氏

(53歳) 保健師・山口県



昭和59年由宇町を経て上関町に奉職。過疎の進む町で母子を支える活動に尽力した。平成11年妊婦全戸訪問を開始、ハイリスク妊婦の早期支援を行うとともに妊婦のための情報誌を発行した。平成3年から地域ぐるみで子育てを支援するセミナーを、16年からは町の施設を開放して親子の集いの場を提供した。関係者らと発達障害児の学習会を重ねて、5歳児発達相談会を立ち上げるなど地域の母子を広く支える活動に精力的に取り組んだ。

第32回（平成22年度）応募要領

表彰対象 55歳未満の者であって都道府県知事・政令市市長・特別区区长から推薦のあった個人で、母子保健事業に5年以上従事し、地域に密着した活動で著しい功績を挙げているとともに、今後も引き続き母子保健事業で大いに活躍が期待できる者を対象とする。

ただし、国・都道府県・政令市・特別区の本庁の現職員および現職の大学教授・准教授は除くものとする。

表彰式典 平成22年11月19日（予定）

応募先 （財）日本母子衛生助成会内

母子保健功労顕彰会本部事務局

〒101-8983 東京都千代田区外神田 2-18-7

電話03-4334-1151（代）

伊南 富士子氏

（51歳） 保健師・大分県



昭和55年旧真玉町に奉職。妊婦や母親が孤立しがちな環境に気づき、母親同士の交流の場を作るとともに母子保健推進員の育成と支援を行い、母子を支える環境づくりを行った。育児サークルの育成や障害児の支援など、広く子育てを支援する体制づくりに熱心に取り組んだ。平成14年には「地域で子育て」をモットーとする「つむぎの会」を発足させて高齢者と親子をつなぐ活動を立ち上げるなど、地域の母子保健の向上と充実に尽力した。

萩野谷 良子氏

（52歳） 助産師・さいたま市



昭和55年日本赤十字医療センターに就職。助産師と保健師の資格を生かし、助産業務や産褥ケア、新生児・未熟児の看護や支援に尽力した。平成12年旧与野市の母子保健活動に復帰。新生児訪問や育児相談、両親学級等で広く地域の子育てをサポートした。自己肯定できずストレスを抱えがちな母親の存在に気づき、自身の育児相談室で相談を受ける傍ら、積極的に地域に出かけて母親の支援を行うなど幅広い活動で母子を熱心に支援した。

向 康子氏

（50歳） 歯科衛生士・神戸市



昭和54年神戸市に奉職。保健所の歯科衛生士1号として歯科保健事業の構築に努めた。妊婦教室、乳幼児健診等で指導や相談、健康教育に取り組むとともに歯科健診結果をもとにした事後指導教室を開催した。阪神淡路大震災を経験して実効性のある予防策が必要だと実感し、平成8年には乳幼児健診におけるフッ化物塗布事業を導入した。妊娠期に始まる生涯を通じたむし歯予防の普及啓発に努めるなど地域保健の向上に多大な功績があった。

福島 正子氏

（54歳） 助産師・福岡市



昭和52年福岡市に奉職。地域の子育てに支援に尽力した。退職後、平成元年に助産師として復帰し、母子手帳交付時から乳幼児健診まで一貫した支援活動を行った。平成6年、育児不安や虐待の早期支援を目指して「育児支援ネットワーク会議」を開き、関係機関との連携を図った。平成12年母子保健施策の企画立案に参加し、虐待防止に重点を置いた施策の実現に努めた。思春期保健やDV相談にも取り組んで地域の母子保健向上に尽力した。

平石 紀子氏

（50歳） 保健師・宇都宮市



昭和57年宇都宮市に奉職。市医師会等と連携して乳幼児健診の充実と体制整備に熱心に取り組んだ。妊娠届を活用したハイリスク妊婦の早期把握と支援体制の整備に努めた。未熟児総合養育支援事業や外国人母子の支援事業に意欲的に取り組んだ。また平成12年、休日も対応する「子育てホットライン」を創設し、平成19年から障害児への一貫した支援体制の整備にあたるなど、幅広い母子保健活動で地域の保健環境の向上に貢献した。

母子保健奨励賞の応募から決定、表彰式典までの日程（予定）

